
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～機械仕掛けの英雄～

リュシカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～機械仕掛けの英雄～

【Nコード】

N0841P

【作者名】

リュシカ

【あらすじ】

一度死を迎えた英雄は、その身を機械に変え甦る。英雄が貫くは己の正義！ たとえ、その先になにが待ち受けようとも！ これは機械仕掛けとなった英雄の物語。

第一話『英雄死す』（前書き）

初めまして。初投稿です。

この小説は、魔法少女リリカルなのはStrikerSにオリジナル主人公を加えた物です。

原作とは、話が違ってきたり、キャラが崩壊するかもしれませんので、それらの事が苦手な人は注意してください。

第一話『英雄死す』

空高くにある黒く染まった雲から、対照的な白い雪が降り注ぐ。
その雪は地面を白く染めている。

「あつ……えつ……」

そこで一人の少女が目の中の光景を見て呆然とする。
少女の目の前に映っている色は空の黒でも雪の白でもなく赤。
彼女の目の前には腹部を凶悪な刃で貫かれ血だらけになっている
男が立っていた。
その血は彼女の全身にも振りかかっている。

「……ちつ……ボケっとすんじゃねえ！ とつとつ、この場から
離れる！」

男は自分の怪我を無視し、少女に怒鳴りつけるが少女は一向に動
こうとしない。

只、男の怪我と自分のバリアジャケットに付いた男の血を虚ろな
目で見続けている。

「……くそつ……これ位の事で固まってんじゃねえよ！！」

「隊長！ 御無事ですか！」

男が少女を怒鳴りつけていると、横から一人の隊員が男に近づい
てくる。

「俺の事は心配すんな！ それより、このガキとつとと、この場から連れ出せ！ さつきから固まって使い物になりやしねえ！」

そう言っつて、男は少女を掴みあげて隊員に投げつける。
隊員は少女をしつかりと受け止める。

「了解しました！ 早く、隊長も下がってください！」

隊員は隊長と呼ぶ男に早くこの場から離れる様に言っつが、

「ふざけんな！ この場は俺がどうにかする！ おまえは隊員全員を連れ、この場から離脱しろ！」

「しかし、その怪我では！」

「こんなのどうつてこたあねえ！ 隊長命令だ！！！」

「……………くっ！ 了解」

隊員は小さい声でそういつと少女を抱え、後ろに下がって行つた。

「……………ようやく行きやがったか……………ぐっ！」

先程、隊員の前では心配を掛けない様に振舞つたが、腹部を貫かれて大丈夫な訳がない。

しかし、貫かれた箇所が悪く、ハッキリ言っつて致命傷だ。

先程、隊員の前で毅然とした態度が出来たのは異常な事だ。

「……………くそっ……………管理局……………最強つて言われた俺が……………ガキ一人庇つてこの様か」

男の受けた傷は任務の帰りに突如現れたアンノウンから受けた傷だ。

本来のこの男ならこんな傷受ける筈ないが、今回は違う。本来ならばこの傷は、先程隊員が抱えて行った少女が受ける筈のものだった。

突如現れたアンノウンが少女を襲い、少女の身体をその凶悪な刃で貫こうとした瞬間、少女とアンノウンの間に身体をねじ込ませて男は少女にその刃が届かないよう身体で刃を受け止めたのだ。

別にこの男にとって、この少女がなにか特別だったわけじゃない。もつといえ、顔を合わせたのだから今日が初めてだ。

任務に出る直前に本局の命令で一緒になっただけに過ぎない。それなのに、この男は命を掛けて少女を守ったのだ。

何故、庇ったのかは男にしか分からない。

只、男は今日初めて会った少女も他の隊員達と同じようにこの隊の隊長として命を掛けて守ったのかもしれない。

少女が隊員なのは今回だけかもしれない。

それでも、隊員ならば命を掛けて守り通す。

それが、この男だ。

「……………ここで、俺も終わりか……………ハハハ、全く……………俺らしい最後だな」

男はすでに自分が限界なのに気が付いていた。

気が付いていたからこそ、この場を預かったのかもしれない。

「……………レジアス……………ゼスト……………悪い。先に逝く」

男は最後に、自分の親友である二人の男の顔を思い出した。

三人とも自分の正義についてよく話してたのを思い出す。

「……ちつ……これが走馬灯つてやつか？ 昔の事をよく思い出す……まさか、俺が見る事になるとはな」

そう苦笑いを浮かべるのも一瞬、男は前を睨みつけ、自分のデバイスを構える。

「……どうやら……お出ましの様だな」

男の目の前に現れるのは、先程自分の腹部を貫いたアンノウンと同型のアンノウン。

数は多すぎて、数え切れない。

「……悪いな……アンノウン共、これから先は一機……嫌、一部品さえ通れないと思え」

そうして、男は無数のアンノウンにたった一人で立ち向かうのであった。

この日、管理局は一人の英雄を失った。

『それで、今回の事件。あの男の話ならば、若き空のエースを落とす筈では？』

『ああ、それがまさかあのような結末になるとは』

『【ベルメル・ハスラー】優秀な駒であったのだがな』

一つの部屋でそれぞれが通信によって話している3人は管理局最高評議会。

ベルメル・ハスラーというのは、前回の任務で少女を庇い戦死した男の事である。

最高評議会にも認められるその力は計り知れないものだったが、

『それで、どうするつもりだ。そう簡単にあの男の様な者は現れんぞ?』

『ああ、あの男はレジアスやゼストとは一線を画した力を持つておったからな』

『あの男の抜けた穴を埋めるのは簡単なことではないな』

最高評議会は今後の事を考える。

ベルメル・ハスラーの抜けた穴を埋めるのは今の管理局では不可能だ。

『なんとかできんものか……』

『……いや、一つだけ方法が無い事も無い』

『ほう、それは?』

議員の一人が言った言葉に注目が集まる。

『あの男の人造魔導士。又は戦闘機人の技術を使用すればどうにか』

『……なるほど、あの技術か』

『しかし、それではあの男にまた余計な力を与える事になる。これ以上あの男に力の与えるのは少々危険だと思うのだが』

『ふむ、幾ら私達の駒とはいえ、これ以上は少々危険であるな』

『ならば、どうするのだ。これ以外あの男の力を取り戻すことは出来ぬぞ』

最高評議会の中に沈黙が流れる。

『こうなれば、我々の手であの者を蘇生させるしかあるまい』

『出来るのか?』

『技術自体はあの男の物を使用すればよい』

『なるほど、それならば確率は低くは無いな』

『では、そういう方向でこの案を進めてよいのか、多数決を取る』

『異議なし』

『異議なし』

『ふむ、では回収されたベルメル・ハスラーの遺体は相応しい研究施設へ送り、あの男の技術を元に、蘇生を進める事に決定する』

こうして、最高評議会の決定の元、英雄ベルメル・ハスラーは蘇

生させる事になった。

この決定が後の管理局に大きな影響を与えることなど、この時は最高評議会でも気が付いていなかった。

第一話『英雄死す』（後書き）

第1話楽しんでいただけたでしょうか？

楽しんでいただけたのなら幸いです。

今回は全て3人称で書きましたが、第2話からは基本オリ主の一人称で進みます。

次回も読んでいただけたら嬉しいです。

感想、アドバイス、誤字脱字などがあればお待ちしております。

第二話『蘇生』（前書き）

今回から、基本主人公の一人称になります。

第二話『蘇生』

……どういうことだ？

突如甦って来た意識に俺は驚愕する。

……あの無数のアンノウンとの戦闘後、俺は力尽きて死んだ筈だ。だけど、今は意識もハッキリしてるし、身体中の感覚も機能している。

……可笑しい。どうなってるんだ？

「おお、ついに目覚めたのか、ベルメル・ハスラー」

……誰だこいつは、なぜ、俺の名前を知っている？

俺は、目の前に居る白衣の男を見る。

「フハハハハ！ やはり僕は天才だ！ あの男の技術とはいえ、ここまで完璧に再現してしまうとは、いやいや、自分の才能が恐いよ。まさか、人を蘇生させる日が来るなんてねえ」

俺は白衣の男の言葉を聞いて納得した。

なるほどな、俺は蘇生されたのか。

確か、戦闘機人や人造魔導士とかいう技術を使えば不可能ではないが……まさか、あの男以外にこの技術を使う人物が居るとはな。

……という事は、俺が今居るのは生体ポッドの中から……道理で少し水中に居る感覚があるわけだ。

……少し、不愉快だ。

俺は生体ポッドの中で魔力を練り上げ、周りに放出する。

バリイイーン！！

放出された魔力に耐えきれなくなった生体ポッドのガラスが音を立てて砕け散る。

突然、生体ポッドが壊れたので白衣の男は驚いているみたいだ。

……まあ、そんな俺には関係ないが。

それよりも……

「おまえは何故、俺を蘇生した！」

「ぐ、ぐえ」

俺は白衣の男の首を掴み持ち上げる。

「早く答えろ！ さもないと、首の骨をへし折るぞ！」

「か、かんりきよくのめいれいで……」

「なるほどな……悪かったな、いきなりこんなことして」

俺は持ち上げていた白衣の男を床に下ろす。

男は首を抑えて必死に息を整えようとしているな。

そんなに強く締めてないだろうに大げさだな。

「それで俺はなんの技術で蘇生されたんだ？」

「……へ？」

「早く話せ！ また締め上げるぞ！」

「あ、ああ！」

少し齧して、説明を尋ねると、男は俺の身体について説明していた。

なるほどな、どうやら俺は人造魔導師と戦闘機人の両方の技術を使用しているらしい。

てつきりどちらか片方の技術だと思ったんだが、まさか両方とはな。

どうやら、人造魔導師の技術だけでは、ボロボロだった俺の死体を稼働させることが出来ず、壊れた身体の部位を戦闘機人技術による、鋼の骨格と人口筋肉に造り替えたらしい。

……それにしてもこいつ、説明し始めた瞬間、人が変わったように話し始めたな。

科学者はこんな奴ばっかりなのだろうか？

「それで、まだなにか聞きたい事はあるかな？」

「いや、大体わかった」

「そうかい？ では、少しその身体がホントに大丈夫か調べたいからね。ちょっと、今から戦闘シミュレーションを行ってくれないかな？」

「ああ」

この身体について知っておく必要があるしな。
さて、この身体でどれだけ出来るか……

そして、行った戦闘シミュレーションの結果は……

「あつははは！ 素晴らしいじゃないか！ さすが英雄と言ったところかな？」

「……おい！ もっと高いレベルのは無いのか？」

……正直、齒ごたえが無さ過ぎてよく分からなかった。

というより、この程度の戦闘シミュレーションなら前の身体でもこれぐらいの事はできた。

「おいおい。もっと高いレベルって、これは最高ランクのシミュレーターだよ？ これ以上のレベルはどんな状況だってありはしないわ」

「……そうか」

どうするか、これじゃあこの身体のとこがよくわからん。

「ふむ、それならば、前の身体の時の君のデータを入れてみようか？ 本当の君と比べれば実力は落ちるだろうが、さっきのシミュレーションよりはマシだと思うが」

「そうだな、頼む」

「わかったよ。それじゃあ準備するから、少し少し待ってくれ」

そう言って、機械を操作し始めると、数分後、目の前に俺の顔を

した男が現れた。

「一様、レベルは最大にしておいたから、SSランク並の力を出ると思うが？」

「SSランクか、まだ少し低いが、力を測るぐらいなら丁度いいか」

まあ、機械でSSランクの力が出せるんだから、これ以上の高望は無理か。

なら、こいつで色々試させて貰うぜ！

戦闘の結果は……

「予想以上だな！」

「ま、まさかここまでとは……僕はなんて男を蘇生させたんだ……」

結果、俺は無傷でその場に立っている。

予想以上にこの身体のスペックは高いな、幾ら機械とはいえSSランク並の力をここまで圧倒できるとはな。

それに、戦闘機人特有のISとか言ったか？

あれが俺にも備わっているようだったから試しに使ってみたが、とんでもないものだったな。

「おい！ このISはおまえが造ったのか？」

「……いい、嫌、私が君に付けたのはこれほどの物じゃなかった……まさか、突然変異か？」

「どうやら、男もこのISの存在は知らなかったようだ。まあ、とんでもない力だが、使う事は無いだろう。」

「この身体の事は大体わかった。次はどうするんだ？」

「あ、ああ。君が目覚めて問題が無いようなら、僕のスポンサーにあつて貰わないといけないんだが」

「スポンサーなあ？」

「まあ、どうせこんな事をしようとする奴等は見当が付いている。どうせあのクソ野郎共だろう……」

『おお、目覚めたのか、ベルメル・ハスラー』

『お主が目覚めるのを待っておったぞ』

『なんせ、お主は管理局にとって欠かせぬ存在だからな』

「俺は今、あの男のスポンサーである、最高評議会の奴等を対面している。」

「対面と言っても、こいつ等は通信で実際にここに居るわけじゃないけどな。」

「よく言っせ！ どうせ、局員達の事を自分達の駒としか思っていないクソ野郎共が！」

『そう噛みつくでない。お主を蘇生させたのは我等であるぞ』

「誰も頼んだ覚えはないが？」

『そう言うでない。お主の力を我々は高く評価しておるのだ』

おまえ等に評価されても嬉しかねえよ！
いつ話しても、腹の立つ野郎共だぜ！

『ベルメル・ハスラーよ。我等の言いたい事はわかっておるな』

『全次元世界の平和のためにはお主の力が必要なのだ』

『我等にその力を貸してはくれぬか？』

はあ？ なにを言ってるんだこいつ等は……そんなもん。

「お断りだ！」

『なぜだ？』

『お主だつて、全次元世界の平和を願ってるのではないのか？』

『管理局の英雄であるお主の力があれば、簡単な事だ』

「ふざけんな！ てめえらに使われるのなんざゴメンだ！ 俺は俺の方法でやらしてもらおう……もう、話す事が無いのなら、これで失礼する！」

『なっ！ 待て、ベルメル・ハスラー！』

『我等の言葉を聞かぬと、後に後悔する事になるぞ！』

『聞いておるのか、ベルメル・ハスラー！』

俺は、クソ野郎共がなにか言ってるのを無視して退室した。

「お話は終わったのかい？」

部屋から出ると、ドアの前に白衣の男が立っていた。

「一体、なんの様だ？ おまえにはもう用は無い！」

「嫌、そんな風に言わないでくれよ、折角なんだし、どこか行きたい場所があれば、連れて行ってあげようと思ってね」

なんだこいつ？ そんなことして一体なんになるんだ？

「なにが目的だ？」

「目的なんて物は無いさ。只、一人の研究者として君に興味を持つてね」

俺に興味だと？ 変わった奴もいたもんだな。

まあ、丁度いいか。こいつに送らせよう。

「わかった。なら、地上本部まで頼む」

「おや、地上本部に一体なんの用だい？」

「簡単な事だ、親友に会いに行くだけだ」

そう男に言つて、俺はさつさとその場を離れた。

地上本部に着いた俺はすぐさま長官室へと向かう。

「失礼する！ レジアス中将は居るか？」

「誰だ！ 許可無く私の部屋に入ってくる輩は！」

部屋の中には目的の人物が居た。

少々、俺の記憶より老けている気がするが、あの顔は間違い様がない。

「俺だ、レジアス！」

「なっ！ おまえは！？」

「少し老けたんじゃないか、レジアス？」

「べ、ベルメル……生きていたのか？」

レジアスは突然俺が現れた事に驚いているようだ。

まあ、戦死した筈の人間が目の前に現れたら、さすがに驚くか。

「まあ、正確に言えば生き返ったってところだけだな」

「どういう事だ？」

レジアスは俺の言葉を上手く理解できなかったみたいだ。

「まあ、その事についてはちゃんと話す……そうだな、まずは俺が戦死してから、今何年経ってるんだ？」

「おまえが戦死した報告を受けてから、5年位だ」

……そうか5年も経ってたのか、そりゃあ、レジアスもこれだけ老けるわけだ。

俺はレジアスに俺の身体について説明した。

「……せ、戦闘機人だ?!？」

「正確に言えば、戦闘機人と人造魔導士のハイブリッドってことだな」

レジアスはどうやら今の俺の身体の状態を驚いてる様だ。

特に、戦闘機人の所に反応していたな、戦闘機人関係でなにかあるのか？

「こんな身体になったとはいえ、俺である事に変わりはない……それよりもゼストはどうしてる？」

レジアスにもう一人の親友であるゼストの事を聞くと、レジアスは顔を歪ませた。

まさか……

「レジアス、まさかゼストは？」

「……ああ、おまえと同じ8年前に戦死した」

「……ッ！　そうか、ゼストが……だが、俺がゼストの事を怒る事は出来ない。」

俺だって、8年前に戦死している筈なのだから。

「……そうか。あいつがな」

一人の親友を失った悲しみが俺の心を揺らす。
レジアスはこれを二人分味わったのか。

「ベルメル。おまえは今後どうするのだ？　また、管理局の英雄として生きていくのか」

レジアスは俺の今後について聞いてくる。

正直言って、まだ決まってるない。

しかし、一つ言える事がある。

「管理局の英雄ベルメル・ハスラーはあの事件で死んだ。ここに居るのは只の英雄なんかじゃない只のベルメル・ハスラーだ。だから、また一からやってくさ、俺の信じる正義をな！」

俺はそうレジアスに伝える。

こうして、俺はまた一から始めていく事にした。

俺の信じる正義の為に……

それから3年後、事態は急激に動き出す。

全次元世界を巻き込みかねないほどの大規模な事件。
死んだ英雄は、再び立ち上がる。

これはその身を機械に変えられた英雄の物語である。

第二話『蘇生』（後書き）

第2話いかがでしたでしょうか。

SSランクが低いと言った主人公の生前のランクは総合SSS+です。

この小説の中では、一様最高ランクという設定です。

ISについては、いつか出す予定です。

第三話『出向』（前書き）

基本主人公がその場に居ない限り、三人称で書きます。
今回も、中盤に三人称になつてゐる個所があります。

第三話『出向』

俺はレジアスに呼ばれて、ある任務を頼まれていた。

「それで、頼めないか？」

「機動六課か……」

任務内容は機動六課への出向および査察調査。
簡単に言えば、スパイだ。

「機動六課って、確かこの間試験的に設立された部隊だったよな？」

「ああ、この資料を見てくれ」

俺はレジアスから資料を受け取り、目を通す。

……なるほどな、確かレジアスが警戒するのも頷ける。

「随分と戦力をかき集めたみたいだな」

資料の内容を読みながら呟く。

隊長格3名が全員オーバーSランク。副隊長2名もSとAAA

+

一般的な部隊と比べて、随分と戦力を固めてるな。

……それが地上部隊に？……なるほどなそう言う事か。

「本局直属部隊か……なかなか面白い部隊だな」

「これが面白いで済む話か！」

俺の言葉にレジアスが興奮気味に机を叩く。

「なにをそう怒ってるんだ？ レジアス」

「そんなモノ決まっているだろう！ 海の連中はいつもそうだ！ 地上の平穩を守って来たのは我々だぞ！」

本局が地上に介入してくる事を極端に嫌うレジアスならそう思うのも当然か。

それに、レジアスは2年ぐらい前から、対AMF兵器戦の対応予算を出してるのに、結果がこれじゃあ面白くないよな。

「それで、長期的な査察を行って、問題点や失態があれば、即部隊長の査問ってところか？」

「ああ、どうだ、頼めんか？」

昔からこういう所はレジアスの悪いところだ。

地上の平穩を守るのは自分たちだって自負が強すぎる。

これ以上本局から警戒視されるのは危ないぞ？

「わかった。この依頼を引き受ける」

「おお、そうか！」

「但し、査問するかどうかは俺の判断で行わしてもらおう」

「むう……わかった。おまえなら問題は無いだろう」

俺の申し出にレジアスは難しい顔で答える。

俺以外が行けば、有らぬ事で本局から反感を受ける事になるかもしれないからな。

本局の上の連中の幾らかは今の俺が英雄ベルメル・ハスラーだった事を知ってる。

俺が行くなら、本局の奴もそう簡単に文句は言えんだろう。

「では、明日より出向して欲しいのだが、よいか？」

「わかった。査察以外は自由に動いていいのか？」

「ああ、査察以外の範囲では自由に動いても構わん。もっとも、問題は起こすでないぞ？ まあ、おまえの事だから心配はしておらんがな」

「わかった。明日より、機動六課に出向する」

「ああ、頼んだぞ」

こうして、俺は機動六課に出向する事になった。

「……はあ、どうしたもんか？」

機動六課部隊長、八神はやては目の前のモニタを見ながら頭を抱えていた。

「どうしたんですか？ はやてちゃん」

そんなはやての様子を見て、パートナーであるリインフォース・ツヴァイは首を傾げながら、今も頭を抱えているはやてにどうしたのか尋ねる。

「実はな、今朝緊急であるメールが届いたんや」

「そのメールになにかあつたんですか？」

はやては首を傾げ続けるリインに軽く微笑みながら、

「まあ、ちょっと見てみ」

そう言って、リインの前にモニタを展開する。

「えっと、なになに……」

リインはモニタに映されている文字を一つ一つ読んでいく。少し読んだ所で、はやての方を見て、

「えっと、六課に一人隊員さんが来るんですか？」

「そうみたいやね」

リインの問いにははやては短く答える。

「それで、誰がするんですか？」

「リイン。もうちょっと先まで読んでみ」

これが本人なら、明らかにおかしい人員投入。
しかも……

「これがまた、メールの差出人がな……」

と、モニタを操作してメールの一番上まで持っていく。
そこには件名の横に差出人の名前も書いており、

「……レジアス中将ですか」

「せや、この人のことやから、絶対なんかあるって思ってな……」

「ですね……」

そうやって、リンもげんなりとする。

先程まで興奮気味だったのに今では大違いだ。

「メールでは只の人員投入って書いてあるけど……」

「……絶対にそれだけじゃないですよ？」

「そうやろうな……はあ」

そうやって、はやては再び溜息をつく。

レジアス中将の性格を考えると、絶対に監視目的なのは明白だ。

しかし、正式な辞令であるからどうする事も出来ない。

しかもよりによって、その人物は管理局の英雄なのだ。

本人かどうかはわからないが、なにかあつたら只では済まない。

「それで、はやてちゃん。英雄さんはいつ六課に来るんですか？」

「ちよい待ち、リイン。慌て過ぎや！」

あまりの衝撃にリインが暴走し、はやてが止めようとした瞬間、

コンコン

「……………え？」

来客を知らせるノックに二人はその場で固まった。

……………ここが機動六課か。

俺は今機動六課の隊舎前に居た。

レジアスに言われた時間より大分早いが問題ないだろう。

さて、まずは部隊長に挨拶をしに行くか……………

……………さて、ここか。

俺はレジアスから貰った六課の資料を見ながら、部隊長室前に来ていた。

それにしても……………

俺は部隊長室から漏れている声に疑問を持つ。

……………なにをこんなに騒いでるんだ？

まあ、いいか……………

俺は、ドアをノックして部隊長室の中に入る。

「失礼します！ 本日付で機動六課に出向となりました。ベルメル・ハスラー一等空尉です」

「……………」

部隊長室に居たのは二人の少女だった。

一人は茶髪のショートヘア。もう一人は身長30?ぐらいの少女だった。

なぜか二人とも目を見開いてこちらを見ている。

……………ん、どうしたんだ？

「あの……………どうかなさいましたか？」

「……………えっ、ああ。すいません……………えっと、あなたがベルメル・ハスラーさんですか？」

「はい、そうですが？」

「ああ、すいません。私が機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です」

そう言いながら、部隊長は俺に敬礼をしてくる。

どうやら、俺が早く来すぎて驚いてるだけだった様だな。

「……………」

……………ん？

誰かの視線を感じてそちらを向くと、もう一人の少女がこちらを凝視していた。

「……………あの、なにか？」

「こら、ライン！」

「へえ？ あっ！ リンフォース・ツヴァイ空曹長です！」

部隊長に注意されてようやく少女が反応、こちらに敬礼をしている。

「あの、到着予定時刻にはまだ大分先だと思っんですが？」

部隊長が敬礼を時、こちらに聞いてくる。

「予定よりも早く到着しましたので、迷惑を掛けたようなら申し訳ありませんでした」

そう言って、俺は頭を下げる。

「えっ……」

俺の様子を見て部隊長が固まっている。

……どこがおかしい所があったか？

話し方や態度には十分に注意した筈なんだが。

「……あっ！ そんな事で頭なんか下げてください！ 少し、驚いただけですから」

「はあ」

俺は頭を上げる。

「えっと、それで、ベルメルー等空尉は今回の出向理由は人員投

入でしたよね？」

「いえ、違います」

「……えっ？」

「自分はレジアス中将の任務で今回この機動六課の長期査察兼監視目的で出向になりました。よろしくお願いします」

俺は正確な任務内容を隠すことなく暴露した。

「「なっ……」」

俺の暴露に部隊長達は信じられない様な顔をしてこっちを見ていた。

第三話『出向』（後書き）

第3話いかがでしたか？

最後の方の主人公の口調は演技です。

自分の事情を知る者以外の前では基本あの口調になります。
まあ、案外簡単に素の口調に戻したりするんですけど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0841p/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 機械仕掛けの英雄 ~

2010年12月4日04時42分発行